

社会規範に対する自己認知と他者認知に関する研究

石川 真

(平成16年10月29日受付；平成16年12月8日受理)

要 旨

本研究では、現代のマナー、エチケットなどの社会規範において他者の行為および自己の行為をどのように認知しているか、その特徴を明らかとすることを目的とした。はじめに、現代社会の中で身近なマナー、社会規範に対する問題行為について12項目抽出して検討した。その結果、他者の行為認知においては、新社会規範因子、過密状況因子、喫煙因子の3因子が抽出された。近年話題となる携帯電話の使用に関するマナーと目上の人に対して敬意を表する行為は異なる因子であった。一方、自己認知においては、1因子のみが抽出された。

続いて、12項目の社会規範に対する問題行為の他者認知と自己認知の関係について検討した。その結果、自己の社会規範に対する行為は、全般的にできるかぎり逸脱を避ける傾向を示したのに対し、他者の認知では、自己の認知ほど問題行動に対して譴責しない傾向が示された。

さらに、斎藤・中村(1987)による対人的志向性尺度(IOS-V)を用いて、対人的志向性の程度の違いが、社会規範の各因子にどのような影響を及ぼすか検証した。その結果、喫煙因子において対人的志向性が高い方が低い方よりもマナーが悪いと評価する有意傾向が示された。さらに、自己認知で抽出された因子において、対人的志向性が高い方が低い方よりも社会規範を逸脱しないようにしている傾向が示された。

最後に、日常生活スタイルの違いが社会規範の認知にどのような違いが見られるか、数量化I類によりその特徴を探った。その結果、喫煙因子において喫煙をやめた者が喫煙経験のない者よりも敏感に社会規範としてマナーが悪いことを認知している顕著な傾向が示された。

KEY WORDS

social norm 社会規範 manner マナー interpersonal orientation 対人的志向性

1. はじめに

総務省(2004)平成16年版情報通信白書によると、インターネットの利用者は平成15年末で約7730万人に達しており、生活の中にインターネットが浸透している。とりわけ、パソコンでインターネットに接続した際に、もっとも利用されるサービスが電子メール(57.6%、複数回答)という結果が示されており、もはやインターネットを利用してコミュニケーションを行うことは特別なことではないと考えられる。

また、学校教育における情報化も着実に進んでいる。e-Japan 戦略の計画によると、2005年度までに「すべての小中高等学校等において、各学級の授業でコンピュータを活用できる環境を

整備する」ことが目標とされており、教育用コンピュータの整備やインターネットへの接続の充実などが着々と推進されている。

その一方で、インターネットを利用したサービスに対してネガティブな、いわゆる情報社会の影の部分の問題となるケースもみられる。2004年6月に起こった小学6年生児童による同級生殺害事件では、その原因の一つが「チャット」とよばれるネットワークサービスであることがクローズアップされた。そして、この事件をきっかけに文部科学省は同年8月に「児童生徒の問題行動対策重点プログラム(中間まとめ)」を取りまとめた。この中で、情報社会の中での情報モラルやマナーについての指導の在り方の確立を大きな柱の一つとして掲げている。とりわけ子どもに対する情報モラル教育の充実を挙げているが、情報モラル等についての効果的な指導手法については、現時点において十分検討されているわけではなく、調査研究を行う必要がある。

長谷川・下村(2000)によれば、情報モラルとは『情報を送受信する際に守るべき道徳』であり、『情報ネットワーク社会において、他に迷惑をかけたり、不快な思いをさせないように情報を扱うための取り決めである』。すなわち、ネットワーク社会を新しいものとして位置づけている点が特徴といえる。

しかし、川浦(1998)は『ネットワーク社会は現実社会の鏡であり、凝縮された世界である』と述べている。そして、『現実社会とネットワーク社会はシームレスであり、ネットワーク社会における問題は、現実社会での問題が一気に表面化されたのではないか』と考えている。また、赤尾(1998)は『インターネットも既存の法体系と別枠で規制する必要はない』と考えている。さらに、山本(1998)は赤尾(1998)の意見に同調した上で、社会自体の変化に応じて法体系を改編すべきであることを述べている。つまり、ネットワーク社会は現実の社会と明確に区別せずに議論すべき対象として捉えており、現実社会でもネットワーク社会でも同じ社会規範が適用されるべきであると考えられている。

大山(1996)によれば、社会規範とは『過去の成員の判断によって形成された社会的価値が明確な行動様式として発現、具現化され、現在にまで伝承されたもの』であり、また、『社会の変化にともない、人々の社会的価値が変化し、既存の社会規範との間にギャップが生ずるようになる』のである。たとえば、10年前ならば、電子メールにファイルを添付することはマナー違反であるという認識が主流であった。それは、ネットワークがまだナローバンド中心の時代であり、また、ハードディスクも決して大容量であるとは限らなかったためである。しかし、急速な技術の発達にともない、これらの問題は解決され、電子メールにファイルを添付することそのものは、電子メールの(便利な)機能の一つという解釈になっている。また、電子メールを利用するユーザー層も劇的に変化している。このように情報社会においては、参画する人々の変化や情報技術の発展にともない、現実の社会以上に急速な社会規範の変化がみられるという特徴がある。

ところで、これまでに社会規範に関する研究では、たとえば社会的迷惑という枠組で検討されている。安藤ら(1998)および森ら(1998)は、社会規範が「他者に対して迷惑であるか」という共通認識を基盤として支えられてきていると考え、社会におけるマナーやエチケットについて検討している。そして、「他者が迷惑と感じるかどうかにについての考慮と洞察が欠落している」ことを問題としている。しかし、社会規範の逸脱した問題行為は必ずしも「迷惑をかけること」だけではない。習慣、慣習、法体系としての位置づけもあり、より高次の枠組として

捉えられる。また、「迷惑をかけさせなければなにをしてもよい」という認知は、社会秩序という観点からも問題が残る。すなわち、「迷惑をかけること」からの観点からではなく、より高次の社会規範に対する認知から検討を加える必要があるのではないだろうか。そうすることによって、激動の現代の情報社会における人々の社会規範に対する認知が改めて明らかにされるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では社会規範がどのように認知されているかを明らかとするために、社会規範から逸脱した行為について自己認知や他者認知を通して検証することを目的とした。さらに、社会規範は対人場面、他者との関わりの中で行動が決定されるとも考えられる。そこで、Rubin and Brown (1975) が対人場面における行動の決定過程の要因の一つとして挙げた対人的志向性に着目し、社会規範に基づく行動の特徴について明らかとすることとした。

2. 方 法

2.1 被験者および調査方法

17～30歳までの高校生、大学生、大学院生の男女108名を対象とした。なお、氏名、年齢、性別については、任意の記入とした。

2.2 質問紙

質問紙は、(1)社会的規範に関して回答を求めるもの(オリジナル)(表1)、(2)斎藤・中村(1987)が作成した対人的志向性の尺度(IOS-V)、および、(3)日常生活状況に関して回答を求めるもの(オリジナル)(表3)の3種類で構成した。

質問紙(1)については、次の手順によって作成された。身近な社会生活の中で他者のマナーが悪いと思うことについて10名の大学生が3～4名ずつのグループに分かれて、ブレインストーミングにより160項目挙げた。これを場所、マナーのタイプ別に分類し、12項目を抽出した(表1参照)。これらは、社会規範に対して逸脱した行為の事例である。

この質問紙(1)においては、他者に対しては、『人々(他者)の次のようなふるまいを目にしたときに、あなたは他者に対してどの程度「マナーが良くない」と感じるでしょうか?』の設問が用意され、1. 非常に感じる～5. 感じない、までの5段階評定尺度により回答を求めた。一方、本人に対しては、『あなたはそのようなふるまいをどの程度することがありますか?なお、喫煙嗜好がない、運転しないなどにより、そのふるまいの経験がない場合は、他者の(実際にそのふるまいをする)立場になって、自分ならどのようなふるまいをするか考えて回答してください。』の設問を用意し、1. 非常によくある～5. 全くない、までの5段階評定尺度により回答を求めた。なお、分析の際に、他者に対する評価の1～5をそれぞれ5～1点に割り振った。一方、自己に対する評価は、回答された評価番号をそのまま分析に用いた。これにより、得点が高い程、マナーに対する意識が高い、逸脱した行為を避けるという解釈が可能となる。

質問紙(2)においては、『次のそれぞれの項目について、あなた自身に最もあてはまるところに○印をつけてください。』の設問を用意し、1. 非常にそう思う～5. 全くそう思わない、までの5段階評定尺度により回答を求めた。質問紙(3)においては、表2に示された通り、各項目に対して複数のカテゴリーを用意し、択一式により回答を求めた。

表1 社会規範評価尺度

1. 夜、電気をつけずに自転車で乗ること。
2. タバコのポイ捨てをすること。
3. 目上の人に敬語を使わないこと。
4. 授業中や講演会中に携帯電話の着信音を鳴らすこと。
5. 禁煙の場所でタバコを吸うこと。
6. アパートや家などで話し声、テレビや音楽の音量に注意を払わないこと。
7. バスや電車内で携帯電話で通話すること。
8. 分別が表示されているごみ箱に分別しないで捨てること。
9. スピード違反などで危険な運転をすること。
10. セルフサービスの飲食店でゴミやトレイを片づけないこと。
11. バスや電車内でお年寄りや身体の不自由な方に席を譲らないこと。
12. エスカレーターで急ぐ人の妨げになるような乗り方をしていること。

表2 日常生活状況の尺度

1. 喫煙の嗜好について
 - a. あり
 - b. 過去にあったが現在はない
 - c. なし
2. 車の運転について
 - a. 運転する
 - b. 免許はあるが運転していない
 - c. 免許なし
3. 携帯電話の所有状況
 - a. 所有
 - b. 過去に所有していたが現在はない
 - c. なし
4. 公共交通機関の利用頻度
 - a. ほぼ毎日利用 (5-7日)
 - b. 週に半分程利用 (3-4日)
 - c. 週に1-2日程利用
 - d. めったに利用しない
5. 居住タイプ (※寮は集合住宅とする)
 - a. 集合住宅で家族等と同居
 - b. 集合住宅で一人住まい
 - c. 一戸建住宅で家族等と同居
 - d. 一戸建住宅で一人住まい
6. セルフサービスの店利用頻度
 - a. ほぼ毎日利用 (5-7日)
 - b. 週に半分程利用 (3-4日)
 - c. 週に1-2日程利用
 - d. めったに利用しない
7. 生活環境 (どのような環境にいたることが多いか)
 - a. 人口密度が高 (例・首都圏)
 - b. 人口密度が中 (例・地方都市)
 - c. 人口密度が低 (その他)

3. 結果および考察

3.1 社会規範の分類からみた特徴

質問紙(1)では、他者の社会規範に対する認知、および自己の社会規範行為に対する認知の評価がなされた。他者に対しては、いわばマナーの善し悪しに関する認知の評価であるのに対し、自己に対しては、その行為を行っているか否かという態度の認知の評価である。したがって、同一の質問項目であるが、各々の性質は異なるため、ここでは、各認知評定を別々に分析することとした。

はじめに、他者に対する社会規範の認知について分析を行った。12項目の信頼性係数を求め

たところ、 $\alpha = .805$ と高い値が示された。しかし、予備調査を行っていない質問項目であるため、さらに検証したところ、項目1を除いた11項目で $\alpha = .816$ の値が得られた。そこで、今回はこの11項目を採用し、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値1.0以上の因子を抽出した。その結果、表3に示された通り、3因子が抽出された。第1因子は、ゴミの分別、携帯電話の使用など、近年になって問題とされている項目が多く、新しい社会規範を意味する因子（以下、新社会規範因子と呼ぶ）と解釈した。第2因子は項目11と項目12が過密状況において考慮されると考えられるため、過密状況の社会規範を意味する因子（以下、過密状況因子と呼ぶ）と解釈した。第3因子については、項目2と項目5から、喫煙に関する社会規範因子（以下、喫煙因子と呼ぶ）と解釈した。

喫煙因子では、項目8も比較的高い負荷量を示しているが、タバコのポイ捨てそのものがゴミと関係しているためと考えられる。一方、目上の人に対する敬語を使わないことが過密状況因子、喫煙因子において負荷量が高くなったことは、特に項目11のお年寄りや身体の不自由な方に席を譲るという行為と関係している可能性が考えられる。目上の人に敬意を表することは、今回取り上げた項目の中では、最も伝統的な社会規範であるといえよう。そうした項目が新社会規範因子と関連がみられないということは、非常に興味深い。

なお、新社会規範因子（第1因子）の項目の信頼性係数は $\alpha = .759$ 、過密状況因子（第2因子）では $\alpha = .570$ 、喫煙因子（第3因子）は $\alpha = .671$ だった。過密状況因子と喫煙因子では重複項目もあり、それを考慮して再分析した結果、過密状況因子では重複項目を含めたほうが高い値を示した（ $\alpha = .674$ ）。一方、喫煙因子では、重複項目を含めないほうが高い値だったため、過密状況因子のみ重複項目を含めて分析を行った。

続いて、自己の社会的規範に基づく行為の認知について分析を行った。全体の信頼性係数は、 $\alpha = .916$ と非常に高いが、他者のふるまいの評価と比較するために、さらに検証した結果、項目1を除くと $\alpha = .918$ となった。この11項目について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値1.0以上の因子を抽出したところ、1因子のみとなった。

表3 他者認知の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
項目9	.750	-.093	.243	.630
項目7	.639	.287	-.083	.498
項目4	.613	.226	.330	.536
項目6	.563	.369	-.038	.455
項目8	.562	-.035	.445	.515
項目10	.524	.483	.207	.551
項目11	.134	.814	-.046	.683
項目12	.218	.669	.294	.582
項目3	-.021	.491	.462	.455
項目5	.240	.302	.719	.666
項目2	.110	-.003	.844	.724
固有値	2.390	1.955	1.948	6.293
寄与率	21.72%	17.77%	17.71%	57.21%

3.2 社会規範の他者認知と自己認知の関係

3.1の分析では、社会規範の他者行為に対する認知と自己行動の認知の特徴を捉えることができたが、自己と他者との関係を考慮した社会規範の特徴を明確に示していない。そこで、ここでは双方の関係について着目し検証を行った。

はじめに、次の4つのタイプに分類した。(A)他者のふるまいに対して、マナーが悪いと思い、なおかつ、自分自身もその行為を行うタイプ。(B)他者のふるまいに対して、マナーが悪いと思い、自分自身はその行為は行わないという正しく社会規範を認識し、規範を遵守するタイプ。(C)他者のふるまいに対して、マナー違反を問題とはせず、なおかつ、自分自身はその行為を行うタイプ。(D)他者のふるまいに対してマナー違反を問題とはせず、自分自身はその行為を行わないタイプ。

3.1で取り上げた12項目がどのタイプに分類可能か示したグラフが図1である。各12項目の各平均値を点で示した。点線の上部がタイプ(B)であり、下部がタイプ(D)である。

この散布図より、本調査の対象とした12場面はタイプ(B)とタイプ(D)のカテゴリーに分かれる。タイプ(B)には項目2, 4, 5, 9, 10, 11, 12が該当しており、タイプ(D)には項目1, 3, 6, 7, 8が該当している。これらのいずれのタイプとも、自己行為の評価において、今回の尺度の中央値である3よりも高く、社会規範から逸脱した行為を避ける認知傾向が特徴である。しかし、タイプ(B)とタイプ(D)には、比較的明確な違いが示されている。タイプ(B)はタイプ(D)よりも他者認知評価のみならず、自己認知評価も高い。

散布図内に示した直線は、 $y=x$ の直線である。すべての評価が $y < x$ であることがわかる。すなわち、自己の社会規範に対する行為はできるかぎり逸脱を避ける一方で、他者に対する社会規範の逸脱に対する認知は比較的許容される傾向を示している。いわば、「自分に厳しく、他

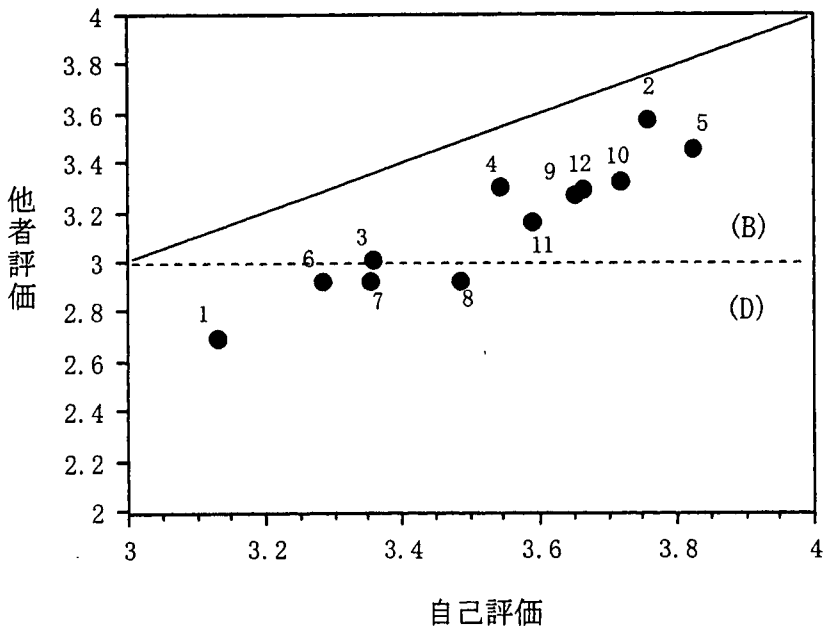


図1 各項目の他者および自己の行為認知散布図

人に優しい」傾向であるといえる。もっとも、「他人に優しい」かどうかは、更なる検証が必要だが、問題意識として、自分自身がより社会規範を遵守しようとする傾向が強く現われている結果がされたと考えられる。

ただし、これらの特徴は全体的傾向であり、現実には個人々がどのような認知をしているかを分析してみる必要はあるだろう。そこで、個人別に、何項目自己の方が「厳しく」評価しているかについて分析した。他者評価の方が自己評価よりも特に高いグループⅠ（12項目中7～12項目に該当）、やや高いグループⅡ（12項目中1～6項目に該当）、同数のグループⅢ、自己評価の方が他者評価よりもやや高いグループⅣ（12項目中1～6項目に該当）、特に高いグループⅤ（12項目中7～12項目に該当）、に分類した。その結果、それぞれⅠ=14、Ⅱ=20、Ⅲ=4、Ⅳ=35、Ⅴ=35であり、「自分により優しく、他人により厳しい」という認識を示したグループⅠ、Ⅱは全体の31.5%を占めていることがわかった。この数値は決して小さくはない。規範から逸脱することが良くないことであると認識しながら、自分自身の行為はその認識にともなわないというこのグループは、社会全体の規範について検討する場合、重要な対象になるのかも知れない。

3.3 対人的志向性と社会規範の関係

ここでは、対人的志向性の違いにより、他者のふるまいの捉え方がどのように異なるかを明らかとするために分析することとした。

はじめに、尺度のより高い信頼性を得るために、 α 係数を求めた。その結果、全体では $\alpha=.552$ だった。尺度の精選を行ったところ、項目1, 17を除く16項目で $\alpha=.658$ となった。斎藤・中村（1987）においては、全18項目で.80が示されているが、今回はそれだけの信頼性を得られなかった。

この尺度は全体で得点が高い程、対人的志向が高いことを示す。そこで、はじめに16項目の合計得点を基にして、対人的志向の高位群と低位群に2分類した。そして、この対人的志向の高さの違いにより、社会規範に対しての認知がどのように異なるのかt検定を行った。

その結果、新社会規範因子および過密状況因子においては有意差はみられなかった($p>.01$)が、喫煙因子では高位群の方が低位群よりもマナーが悪いと評価する有意傾向が示された($t(97)=1.900, p<.10$)。一方、自己因子においては、高位群の方が低位群よりも社会規範を逸脱しないようにしている傾向が示された($t(96)=2.177, p<.05$)。すなわち、他者に対しても、自己に対しても、対人的志向の高い者の方が社会規範に対して遵守すべき姿勢がみられることがわかった。

さらに、対人的志向のより詳細な傾向をさぐるために、16項目を用いて主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットにより4因子が抽出された(表4)。

各因子を構成する負荷量の高い項目内容を考慮し、また、斎藤・中村（1987）の解釈も参考とし、第1因子は対人的関心因子、第2因子は人間関係志向因子、第3因子は個人主義傾向因子、第4因子は第2因子の派生タイプ因子と解釈した。

続いて、因子ごとに、負荷量が.400以上の項目を対象に、信頼性係数を求めた。なお、第2因子は、第1因子にも負荷量が高い項目16、第4因子にも負荷量が高い項目18を含めた。この結果、第1因子が $\alpha=.689$ 、第2因子が $\alpha=.632$ 、第3因子が $\alpha=.496$ 、第4因子が $\alpha=.333$ であることがわかった。今回は信頼性係数が特に低かった第3, 4因子は分析対象から除外した。

表4 対人的志向性尺度の因子分析結果

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
10. 他人事でも、一喜一憂することが多い。	.739	.028	.166	-.233	0.629
8. 他人の行動の動機を知ることに関心がある。	.635	-.009	-.031	.065	0.408
11. 人からの批判が気になる。	.618	.088	.227	.356	0.568
16. 日頃から人間関係を大事にしている。	.575	-.405	-.165	.161	0.548
4. 自分と関わりのある人については、なるべく色々なことを知りたいと思う。	.535	-.047	-.124	.053	0.307
12. 同じゲームをやるなら、1人でできるものよりも相手がいてできるものの方がよい。	.534	.244	-.157	.165	0.397
15. 人が私の行為についてどのように考えているかという事は重要ではない。	.011	.719	.044	.061	0.523
14. 人から個人的な話をもちかけられるのは煩わしいものだ。	.175	.620	.154	.075	0.444
6. 他人の感情や気持ちを考えることは意味がない。	-.064	.600	.033	-.290	0.449
9. あまり人のことには立ち入らない方である。	-.309	.470	.167	.272	0.418
7. 人付き合いがよい方だと思う。	.320	.267	-.451	.242	0.436
3. 人のことには構わずマイペースで行動する方である。	-.136	-.012	.641	.135	0.448
5. 自分にとって人間関係は煩わしいものである。	.128	.319	.669	.063	0.570
13. 人が本当はどんな人物であるかに関心がない。	.061	.366	.616	-.288	0.600
2. 微笑みかけたり嫌な顔をする人が気にかかる。	.182	.262	-.063	.661	0.543
18. 仕事上の付き合いでは、個人的に親しくなることは重要ではない。	-.083	.432	-.060	-.738	0.742
寄 与 率	15.90%	14.24%	10.32%	9.71%	50.18%

因子ごとに負荷量の高い項目を選び、その平均値を基にして対人的志向の高位群と低位群に2分類した。そして、社会規範（他者認知の3因子および自己認知の1因子）に対してどのような違いが見られるか対人的関心因子および人間関係志向因子についてt検定を行った。その結果、対人的関心因子においてはいずれも有意差は見られなかった。一方、人間関係志向因子においては、自己因子において、高位群の方が低位群よりも社会規範を逸脱しないようにしている傾向が示された ($t(96)=2.667, p<.01$)。

3.4 生活スタイルの違いによる社会規範の認知

ここでは、各個人の生活スタイルの違いが社会規範にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするために、3.1で求めた他者認知の3因子と自己認知の1因子それぞれを外的基準、社会生活に関する7項目を説明変数とし、数量化I類により分析した。

はじめに、7項目の回答に対してカテゴリー内に極端に少ないものが含まれていないかを確認した。今回は、携帯電話使用についての「b. 過去に所有していたが現在は無い」の回答数が5%以下であったため、このカテゴリーを分析対象から除外した。

分析の結果、各決定係数は、第1因子が.299、第2因子が.246、第3因子が.296、自己因子が.359であり、いずれも高い値は得られなかった。しかし、日常の生活環境の違いが少なからず社会規範に影響を及ぼしていることを否定するものではない。

続いて、偏相関係数の高いアイテムが、外的基準に強い影響を及ぼしていることを示しているため、因子ごとに偏相関係数の無相関検定を行った。そして、他者認知（第1因子～第3因子）、自己認知の各アイテムのうち、最も偏相関係数の高いものを抽出して示した（表5）。

新社会規範因子に最も影響力のあったアイテムは、居住タイプであった。しかし、カテゴリーのウェイトを見るかぎりにおいては、規則性は特に示されていない。過密状況因子においても、居住タイプの違いがもっとも大きく影響を及ぼしていることが示された。そして、ここでもカテゴリーのウェイトを見るかぎりにおいては、規則性は特に示されていない。しかし、双方のカテゴリーのウェイトの大小関係は同一である。

喫煙因子は、喫煙のアイテムが大きな影響を及ぼしている。ここで示されているのは、喫煙をやめた者が喫煙経験のない者よりも敏感に認知している点が特徴であるといえる。

自己因子は、喫煙に関して比較的大きな影響を及ぼしていることを示している。ここでは、喫煙因子とは異なり、喫煙経験のない者がもっとも社会規範に基づいた行動をとるという自己

表5 数量化I類による偏相関係数に着目した分析結果

アイテムとカテゴリー	ウェイト	偏相関係数	t 値
新社会規範因子	a	0.457	0.330 3.410**
5. 居住	b	-0.036	
	c	-0.228	
	d	0.102	
過密状況因子	a	0.497	0.337 3.489**
5. 居住	b	-0.123	
	c	-0.207	
	d	0.211	
喫煙因子	a	-0.426	0.385 4.072**
1. 喫煙	b	0.593	
	c	0.363	
自己因子	a	-0.503	0.521 5.913**
1. 喫煙	b	0.439	
	c	0.471	

** : $p < .01$

認知をしていることが示された。

以上のように、日常生活状況の違いは、その影響力は大きくないものの、社会規範の認知には無関係ではない。喫煙行動のアイテムのように、社会規範に直接的に関連する日常生活状況はその影響力は大きい。したがって、今後、社会規範の認知を検証する際には、日常の生活スタイルとの関連性を考慮する余地はあると考えられる。

4. おわりに

本研究では、激変する現代社会において、社会規範がどのように認知されているかを明らかにするために、社会規範から逸脱した行為について、自己認知や他者認知を通して検証分析を試みた。とりわけ、他者認知と自己認知の違いや関連性、対人的志向性の違いや生活スタイルの違いによる社会規範の認知の特徴に着目した。

はじめに、現代社会の中で身近なマナー、社会規範の逸脱した行為の12事例についてその特徴を探った。その結果、新社会規範因子、過密状況因子、喫煙因子の3因子が抽出された。近年話題となる携帯電話の使用に関する規範と目上の人に対する規範は異なる因子として分類された。続いて、他者の認知と自己の認知の関係を社会規範の逸脱した行為の12事例を基に検討した。その結果、自己の社会規範に対する行為は、全般的にできるかぎり逸脱を避ける傾向にあり、一方、他者の認知では、自己の認知ほど譴責しない傾向が示された。

続いて、斎藤・中村(1987)による対人的志向性尺度(IOS-V)を用いて、対人的志向性の程度の違いが、社会規範の各因子にどのような影響を及ぼすか検証した。対人的志向性全般の傾向として、喫煙因子では高位群の方が低位群よりもマナーが悪いと評価する有意傾向、自己因子は高位群の方が低位群よりも社会規範を逸脱しないようにしている傾向を示しており、他者に対しても、自己に対しても、対人的志向性の高い者の方は低い者よりも社会規範に対して厳しい見方をしていることがわかった。また、対人的志向性を因子に分けて詳細な分析を行った際においても、同様の傾向が示された。

最後に、日常生活スタイルの違いが社会規範の認知にどのような違いが見られるか、数量化I類によりその特徴を探った。その結果、その影響力は大きくないものの、日常生活状況の違いは社会規範の認知には無関係ではなく、とりわけ、社会規範に直接的に関連する日常生活状況はその影響力は大きかった。

社会規範が対人関係、生活スタイルなど、さまざまな社会的要因によって他者認知、自己認知がなされていることが示された。こうした認知過程を踏まえ、単に「他者に迷惑をかけない」だけの情報モラル教育に留まらないカリキュラムや教育プログラムの開発を推進していく必要があるだろう。

参 考 文 献

- 赤尾晃一(1998)座談会インターネット社会。『インターネット社会』(川浦康至編)、現代のエスプリ、至文堂、8-31。
- 安藤直樹・斎藤和志・藤田達雄・北折充隆・吉田俊和(1998)社会的迷惑に関する研究(1)-認知された迷惑度の分析-。日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集、

236-237.

- 長谷川元洋・下村勉(2000)情報モラル.『教育工学辞典』(日本教育工学会編),実教出版,323-324.
- 川浦康至(1998)座談会インターネット社会.『インターネット社会』(川浦康至編),現代のエスプリ,至文堂,8-31.
- 森久美子・廣岡秀一・石田靖彦・元吉忠寛・吉田俊和(1998)社会的迷惑に関する研究(2)-迷惑度の自己認知と他者認知に関する分析-.日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集,238-239.
- 文部科学省 情報化への対応 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/main18_a2.htm
- 大山七穂(1996)価値と規範.『社会心理学パースペクティブ3』(大坊郁男・安藤清志・池田謙一編),誠信書房,237-262.
- Rubin, J. Z. and Brown, B. R. (1975) The social psychology of bargaining and negotiation. New York: Academic Press.
- 斎藤和志・中村雅彦(1987)对人的志向性尺度作成の試み.名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),34,97-109.
- 総務省 情報通信白書 <http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h16/index.html>
- 山本葉子(1998)座談会インターネット社会.『インターネット社会』(川浦康至編),現代のエスプリ,至文堂,8-31.

A Study of Self-Cognition and Others Cognition for Social Norms

Makoto ISHIKAWA

ABSTRACT

The purpose of this study was to verify characteristics of self cognition and others cognition for social norms such as manners and etiquette. In this study, twelve undesirable acts of present society were extracted.

First, twelve undesirable acts were analyzed by factor analysis. The components were classified into three basic dimensions, 'new social norms', 'density situation', 'smoking' in others cognition. The components of self-cognition were one dimension.

Secondly, the relationship between self and others cognition was analyzed. As a result, it was shown that they avoided undesirable acts as much as possible in self-cognition, while they did not evaluate undesirable acts strictly in others cognition.

Thirdly, the effects of interpersonal orientation (IO) were verified in each social norm component. As compared with Low-IO one, High-IO one behaved in preferable social norms.

Finally, the effects in style of everyday life were verified in each social norm component. And It was shown that the difference of the style of everyday life had influences on social norms.